



| | |
|------------------|---|
| Title | 17世紀ドイツ語圏における新聞の社会的反響とその歴史的意義について |
| Author(s) | 江口, 豊; EGUCHI, Yutaka |
| Citation | メディア・コミュニケーション研究, 75, 11-38 |
| Issue Date | 2022-03-11 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/85268 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 02_eguchi.pdf |



17 世紀ドイツ語圏における新聞の社会的反響と その歴史的意義について

江 口 豊

0 序

17 世紀初頭に印刷された新聞が販売され始め、短期間のうちにドイツ語圏のみならず、隣国オランダをはじめとするヨーロッパ諸国に拡散していった。印刷された新聞でさえも、年間購読が基本であり、誰もが個人単独で購入できるような安価なものではなかったが、ニュース媒体としての先駆形態のひとつであった手書き通信などに比較すれば、幾分かは購入し易くなったといえる。これに加えて、共同購入による回し読みという受容方法も読者層を拡大させる一助となった。経済力以外にも、そもそも物理的・距離的に新聞を購入、入手可能かも含めて、識字能力などの新聞受容の壁を乗り越えさせたものとして、人々の集まる場所での読み上げという受容現象が論じられている。こうして一旦公の領域に流れ出したニュースの波がかなりの程度社会全体に繰り返し流布していたと推測できる。

こうした状況が継続すると、社会全体へのニュースの拡散という現象に対するさまざまな評価や考察が記されるようになった。それらを集めた代表的なものの一つが、Kurth (1944) の編纂した *Die ältesten Schriften für und wider die Zeitung* (『新聞に対する賛否の最古の書』) であろう。同書は最近になって新聞史研究者 Wilke (2015) により解説を付された上で、2 点の書を追加収録した形で新たに刊行されている。この他にも、ドイツ語圏では新聞とその普及や影響に対する受け止めなどを記述したものがいくつか刊行されている。例えば、Blüm/Engelsing (1967) は、新聞や新聞学に関する文章を刊行当時直近の 20 世紀のものまで収録して紹介している。1609 年に世界最初の印刷新聞 *Relation* をストラスブールで発行したヨハン・カロルスによる読者宛ての文章から始まり、総数 89 点の文章が収められている。このうち、17 世紀中に書かれたものだけを取り上げても、Johann Peter von Ludewig の *Das Zeitungskolleg* までで 26 点を数える。26 点の文書には、Wilke (2015) 所収の文書も部分的ではあるが重複して収められている。また、時代が若干下るがもっとも詳細で網羅的な Stieler (1695/1697) の新聞論もよく取り上げられている。

このように、新聞が公共メディアとして成立する過程で、当然のことながら新聞やニュース

について様々な論評、論考が発表されていた。小論では、多くの民衆にとって口頭コミュニケーションが主要な役割を担っていた状況の中で登場した印刷新聞について、こうした記述を辿り、印刷新聞が与えた影響やそれへの評価の全体像を検討、考察することを目的とする。さらには、当初週刊、後に日刊となっていた新聞による、社会に対する永続的な情報提供の意義についても考えを巡らせたい。新聞の拡散が啓蒙主義の下地を形成したという指摘もあるが(Böning 2002/2011)、そもそも社会全体の世界認識と新聞の定着、普及との関連をどのようにとらえるべきかという問題でもある。

1 17世紀における新聞に対する見方を示す痕跡

現代においても、メディア評価に関しては常に肯定的なものと否定的なものが併存する。歴史上最初の公共メディアとなった新聞に関してもこれは当てはまる。歴代の新聞評価についてすべて取り上げることは困難であろうが、幸い新聞史研究の派生的産物としてドイツ語圏でいくつもの論集が刊行されている。ここではそうした論集に収録されたもので、17世紀中に著された代表的なものを紹介し、検討してみる。ただし、Wilke (2015) の場合、収録した六つの書が文字通り印刷された今日的な意味の「印刷された新聞」を論じている保障はないとして二つの理由を述べている。ひとつは、*Zeitung* というドイツ語表現の意味がニュースとニュースを伝える媒体の両方を示すように「17世紀には一義的に確定していなかった」こと、もう一つは「その表現で示される対象が印刷された形に限定されていかなかった」からとしている。さらに「六つの書のうち四つはラテン語で書かれたものであり」、それは読者層が極めて限定されていたことを意味する。ということは、*Zeitung* の影響といえども対象も一次的な読者も重ならないということである。Wilke (2015) が収録したのは以下の6点である。カッコ内の数字はオリジナルの発行年とされている。

1. Christophorus Besold (1629) Thesaurus Practicus — Lemma: *Neue Zeitungen*
2. Ahasver Fritsch (1676) Diskurs über den heutigen Gebrauch und Missbrauch der *neuen Nachrichten*, die man »*Neue Zeitungen*« nennt.
3. Christian Weise (1676) Interessanter Abriss über das Lesen von Zeitungen.
4. Tobias Peucer (1690) Über Zeitungsgeschichte.
5. Johann Ludwig Hartmann (1679) Unzeitige Neue-Zeitungs-Sucht und Vorwitziger Kriegs-Discoursen Flucht.
6. Daniel Hartnack (1688) Erachten von Einrichtung Der Alten Teutschen und neuen Europäischen Historien.

しかし、最後の2点はテーマが新聞やニュース以外にも広がるものとされ、部分的な収録とさ

れる。本稿では最初の4点を中心に検討する。

1.1 Christophorus Besold (1629) Thesaurus Practicus — Lemma: ›Neue Zeitungen‹

Besoldの著書は本来法律専門語辞典とでもいうべきものであり、これまでよく紹介されてきた2ページほどの記述は、その一項目 ›Neue Zeitung‹の解説である。この専門語辞典では見出し項目はドイツ語を用い、説明はラテン語で記述されている。マンハイム大学図書館が電子形式で公開している1643年版では660ページと661ページにまたがって掲載されている(版によりページ数に異動あり)。わずか2ページ足らずの記載であるが、従来新聞への反響や評価ではたいい冒頭に紹介されてきた。Besoldが本書を刊行した1629年の時点では、定期的印刷新聞はドイツ語圏の至るところに普及してはいなかった。Bogel/Blüm (1971)に基づいて集約したところでは、20都市までには至っていない。›Neue Zeitung‹はむしろ定期的に印刷される以前や以後にも契約され、読まれ続けた手書きでの通信(›geschriebene Zeitung‹)やそれを通じて拡散したニュースを意図していた可能性が高いのである。Wilke (2015, 22)も、Besoldの活動の中心地であったTübingenで印刷新聞が存在していない可能性を前提にそう理解すべきとしている。

Besoldは、まず人間が本来持っている好奇心について、カエサルのガリア戦記と新約聖書の使徒行伝を引用しつつ、ガリア人とアテネ人との特性として記述している。

「旅行者をその意思に反してでも留まらせ、そのうちの誰かがかかつて聞いたり、見聞したことについて尋ねたり、さらには都市では商人たちを取り囲み、何処の地域からやってきたのか、そこでどんなことを見聞したかを語らせずにはおかないというのがガリア人たちの習慣である。こうしたうわさや聞きかじったことに基づいて、彼らは大変に重大な事柄について決定する。そのことを彼らはすぐに悔いることになるはずだ。なぜなら不確実な噂に左右されることになるからであり、相当多くの商人たちが、質問してくる人たちのために絵空事を持ち出すからでもある」(『ガリア戦記』、124)¹⁾。

「すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである」(使徒行伝第17章21節)²⁾。

Besoldは、「よそで起こったことや起こることについて知らないのは、いわば矯正施設や牢獄に一生閉じ込められているようなもの」と述べているものの、空しいことは避けなければならないと説いている。Besoldの警句は、「軽率な男たちは新しいことに注意を向けるきらいがある。まっとうな男たちは自分の仕事以外に構おうとしない」とあり、これを耳にすることのないようにというのである。その一方で、Besoldは、「新しい知らせを公にする際には用心して行うべき」とも述べている。多くの人がそこから心のうちに秘めた最後の秘密や意義を引き出そうとするし、実際そうするからである。Besoldは、「新たな知らせ」が「単に馬鹿げた内容を広める」だけでなく、とくに戦時などで味方に利するような勝敗の虚報伝達の手段となっ

たこと、それが政治的にとてつもない利点をもたらすことを歴史上の事例を交えながら指摘している (Wilke, 46)。

結局、Besold の態度は、ニュースに対する好奇心を隠さなかったドイツ語圏の人々にも最初のガリア人やアテネ人の弱点を当てはめて、ニュースにばかり気を取られることのマイナスを指摘するだけで、公共的な情報伝達のプラス面には触れていない。

1.2 Ahasver Fritsch (1676) Diskurs über den heutigen Gebrauch und Missbrauch der »neuen Nachrichten«, die man »Neue Zeitungen« nennt.

Fritsch (1676) の書が本来どのような形態で刊行されたものかは不明である。Fritsch 自身については、法律家であり、信心のための書や讃美歌作者としても知られている。本書は5章構成で、「新たな知らせ」(Neue Zeitungen) の内容を知らうとする人間の好奇心について、Besold 同様ガリア戦記と新約聖書などを紹介した後に、過大な好奇心で「新たな知らせ」を読み、聴くことが誤りであると述べる。さらに「新たな知らせ」が拡散することに注意を要すること、それを過信してはならないこと、最後には「新たな知らせ」に意図的な偽情報を盛りこみ、また拡散させることに対する処罰についても論じているが、この点は Besold の指摘と一致している。僅か2ページの Besold と比較して、現代ドイツ語訳で11ページ以上の長さのため、Fritsch は人間の好奇心についても相対的な記述を与えつつも、同時代のドイツ人たちも身分や地位に関わらず、新しい出来事に対する好奇心が強いことを認めている。様々な軍事情勢の変動が関心を引き起こした三十年戦争の影響もあってこの傾向が強められたこと、活版印刷術によって読者が限定されていた手書き通信から読者数が増加した印刷新聞が登場したという背景も踏まえている (Wilke 2015, 53)³⁾。また Fritsch は、受容者が「民間人」であるか「公人」(例として「君主、国家の統治機関、公務に携わる者」が挙げられている) であるかを、ニュースを読むべきか否かの基準の一つと考えていた。状況の変化によりさまざまな危険や損害を回避する義務が公人にはあるからだとしている。逆に民間人がそのニュースに好奇心を寄せることを、イギリスの神学者 Richard Baxter を引用しながら「自分自身ではなく他人に関わるニュースに……時間を無駄に浪費し、取り組むべきことをおざなりにする」ために非難されるべきことと断じている (Wilke 同上、54)。そしてこの非難は聖職者にも向けられている (Wilke 同上、55) Fritsch も、ニュースを伝える新聞により情報操作すら行われていることを指摘している。こうしたことから Fritsch は新聞の検閲をも支持している。その延長でとくに偽情報の起草と拡散の双方に関わる行為を厳しく非難している (Wilke 同上、58)。さらにはそうした行為に対する刑罰としてふさわしいものが、入牢、追放、殴打の刑だとし、意図的に君主や役所の意向に反した場合、とくに敵への裏切りにより国の体制を危険にさらす場合は死刑さえも適切であるとしている (Wilke 同上、60)。

1.3 Christian Weise (1676) *Interessanter Abriss über das Lesen von Zeitungen*.

『新聞を読むことに関する興味深い概要』と題された本書は、表面上 Fritsch とは逆の立場に立つ論述と取られそうな書き出しであるが、両書は共に 1676 年に公刊されている (Wilke 2015, 29f.)。Weise は新聞を「郵便局で集約、印刷、販売された」ものとしている (Wilke 同上, 64)。ただ、こうした情報が馬鹿げた情報と紙一重であり、(新聞制作者、編集者にとっても) 確実な情報入手が困難であることも認めた上で、新聞の利点あるいはその機能に着目している。彼が着目するのは、「地理、家系論、歴史、政治、その他のいかなる学問でも直接、間接」に新聞が果たす役割と利点である (Wilke 同上, 66)。また、20 世紀以降インフォテイメントという言葉で表されるように、新聞にも娯楽の一面があることも認めている (Wilke 同上, 102)。

Weise は、新聞の働きについて論じるに先立ち、国や地方によりそれぞれ新聞の特徴に相違があることを指摘している。つまり、「プレスラウの新聞がポーランドや一部オーストリアの事情に詳しいこと、北欧についてはリューベックの新聞、イギリスについてはハンブルクの新聞、フランスの事情についてはフランクフルトの新聞を通じて読みたい」と述べている。そしてライプツィヒの新聞がヨーロッパ全体の事情に詳しいと評価し、ドイツ語以外の新聞についても、「フランス語の新聞の優雅な文体のみならずフランス人独特の鋭敏なセンス」などが魅力であり、「ケルンのラテン語新聞 (何を指すのかは具体的に触れないが) が神聖ローマ帝国の国政にもっとも相応しいために勧める」ものだとしている (Wilke 同上, 67f.)。

こうした「前書き」の後で、Weise は 5 章にわたり様々な知的分野との関連で新聞がもつ効用を表題に据えているが、その利点は限定的であるというのが本来の主旨である。ここでいう利点とは知識の面で学習できることという趣旨と解される。第 1 章で地理学、第 2 章で各国君主の家系論、第 3 章で歴史、第 4 章で政治との関連領域、最後の第 5 章ではさまざまな分野で興味を持つ人々にもたらされる利点を論じているが、新聞購読を効果的にするための前提として一定の予備知識を求めている。そうした素養が欠けている場合にはむしろ新聞の情報がマイナスにはたらくとも指摘している。

新聞報道の対象としては軍事的事件が少なくない。そこに地理上の名称が国や言語で異なる場合もある。こうした事情にも拘わらず、新聞報道による地理情報の継続的な受信により、対象 (すなわち事件の発生場所) は限定されるものの、読者はより正確で、新たな地理的理解を手に入れる。

新聞が家系論上もつ利点は、当然ながら統治者である王侯君主の動静に直結するからである。この点は正当な統治者である資格の前提となる他、婚姻関係が外交手段として常態化しているために逆に外交紛争の種ともなりうることを見れば一目瞭然である。Weise は高位聖職者についても、家系論上の影響が及ぶことを指摘しているが、これは、例えば神聖ローマ帝国のように 16 世紀末時点で 3 名の選帝侯 (マインツ、トリア、ケルンの各大司教) を高位聖職者

が占めていたという政治体制上も無視できない重要性をもっていた。

歴史上の利点として、現代の諸々の事件を報じる新聞は現代史理解の補充になると Weise は指摘している。とくに発信地の違いにより、複数の視点を経験するという歴史記述の中立性が新聞の利点だと述べている。

政治との関連で述べられている点は、「いつでも政治的に衆目を集めること、利得となることについては、新聞に助けとなること、警告、先例となるものが得られる」(Wilke 同上、96) としている。具体的には諸侯の宮廷で起こる様々な事件が紹介されている。

また特定の領域に限定しない場合でも、「興味をもった人々が新聞によって手に入れる利点」(Wilke 同上、97) の現れる例として、芸術、宗教、医学、司法判断、博物学、土木工学、数学、他人の中傷など、様々な領域が挙げられている。「商人たちにとって新聞が利益になる」(Wilke 同上、101) ことも触れられているが、そこでは通貨やレートの不統一が問題になることも忘れられてはいない。また軍事や海運での専門用語も報道では問題になることがある(Wilke 同上、102)。また、最終的に、「娯楽として新聞を読む」というエンターテインメント的側面にも触れている(Wilke 同上)。

以下の二書は Wilke が追加で掲載したものであり、しかも内容が一部のみ抜粋されて現代ドイツ語に訳されたものである。

Johann Ludwig Hartmann (1679) Unzeitige Neue-Zeitungs-Sucht und Vorwitziger
Kriegs-Discoursen Flucht.

本書の議論は、Ahasver Fritsch の主張の延長線上にあるものと言えよう。基本的に「新たな知らせ」(ニュース)の否定的な側面(好奇心に駆られて読むことや誤情報を広める可能性があること)を強調して、真実を告げ知らせる神の言葉の重要性を説くという文字通り説教めいた内容となっている。Fritsch の論に加えるべき、独自の新たな論点は確認されない。

Daniel Hartnack (1688) Erachten von Einrichtung Der Alten Teutschen und neuen
Europäischen Historien.

本書も抜粋の形で掲載されており、本来は歴史記述が主たるテーマの文書とされる。ニュースと歴史記述との類似性や相違を組み合わせる論者は多い。「新聞と歴史とが近しく、互いに関連が強い」ことも指摘している。「最初の4章では、歴史記述の条件と特性」としてまだ「当時は虚構の文学的な面と事実即した年代記的面が含まれていた」ことが指摘されている(Wilke 同上、36f)。Hartnack は第5章で同時代のニュースについて、見本市通信、Diarium Europaeum というヨーロッパ政治に関するラテン語実録の印刷物(全部で45巻が現存)、そして新聞を三つの「精髓」としている。Hartnack の論点の多くは Stieler にも受け継がれている。それが、人々の好奇心を否定的に捉えるが、必ずしもニュースを読むことの利点を打ち消すものとはされない。読者が公人(聖職者、政治家、軍人など)であれば新聞を活用しなければ

ばならないと述べている (Wilke 同上、37)。新聞を否定的に判断する理由に挙げられる「重要でもないニュース素材が掲載されること」、「情報の誤り」についても、それぞれ毎週刊行せざるを得ないという事情や »Relata refero« (伝えられたとおりに報じる) という当時の原則を紹介し、庇う姿勢を見せている (Wilke 同上、38)。とりわけ第8章で Hartnack は読者の職業や身分、年齢による有用性を具体的に述べ、「世界という書物を開くもの」としての新聞を評価している (Wilke 同上)。

1.4 Tobias Peucer (1690) Über Zeitungsgeschichte.

『新聞史について』と題された本書は、「新聞に関する最初の博士論文」(Wilke 同上、20)とされるものである。Wilke によれば、Tobias Peucer は Görlitz の生まれ、本来医学専攻であったが、この哲学歴史学博士論文は 1690 年 3 月 8 日に神学者でライプツィヒ大学学長のアダム・レヒェンベルクの下で口述試問が行われたものである。後に彼は性病に関するテーマで医学の学位論文も書いている (Wilke 同上、20f.)。学位論文であるためか、他の新聞評論の文章と比較して「記述の体系性と分析の深さの点で秀でている」(Wilke 同上、31) ことを Wilke も指摘している。「オリジナルは」わずか「29 ページで構成されていて、今日の博士論文とは比べるべくもない」(Wilke 同上)。それにも拘わらず、Peucer が新聞の定義の一つである「即時性」に着目していることは興味深い。また、今日というニュース価値理論や新聞の起源や歴史記述との関係にも論を進めている。新聞成立の原因として Peucer が挙げているのは、人類学的な要因としての「好奇心」と刊行に関わる人々の「利益追求」という経済的動機付けの点である。好奇心に関しては、ここまで取り上げた他の論者たちも多くが触れている。チラシやパンフレットのような路上販売の印刷物に盛り込まれたニュースが、小規模化、家内産業化した印刷業者などの現金収入獲得の手段であることもたびたび指摘されている (江口 2015 参照)。

Peucer は、「歴史的な話は進行する筋により成立する」「出来事の特定の羅列に注意が払われて、それに応じて一般的な歴史、部分史、特殊な歴史…が語られる」としている (Wilke 同上、108f.)。これに対立するものとして考えられるのが、「ギリシャ人たちの言い方にあるように、秩序立てることに意を介しない、「雑多なるもの、変化に富んだ話」ということになるが、Peucer は、「新聞報道を多種多様な出来事を公表するもの」(Wilke 同上、109) に含めていて、「最近の世界のあちこちでの」「出来事やその原因を単に記述することに留める」のがニュースの特質だと述べている。また、中世に修道僧たちが記述した歳時記 (Chronik) にも同じ特性がみられること、それが取り立てて教養程度の高くない人々が真似る格好で、世俗的なニュースにつながったとみている。

また、ニュースの起源について Peucer は執筆時点で Johann Carolus の Relation 紙や Wolfenbüttel の Aviso 紙の存在については承知していなかったようで、印刷された新聞の起

源については不明としている（Wilke 同上、110）。

Peucer は新聞とその発行者の「理由（Grund）」や「動機（Veranlassung）」について論じるなかで、新聞の発行者には、信頼できる情報と単なる噂や疑いなどを判別する能力を求めている。また真実に対する思い入れを重視し、キケロ、ストラボン、ヘロドトス、セネカ、果てはアレクサンダー大王の故事まで引用しつつ（これが当時のアカデミズムの常套的論法であり、重視されていた点とも思われる）、噂を聞いた場合よりも目撃者がいる場合の信頼性が高いことに注意しながら情報源が重要であること、複数の情報源による一致の意義にも触れている。

Peucer はまた、ニュースの内容についても分析を進めている。ニュース作成の際には「一定の選択をしなければならない」こと、そしてそれは「記憶すべきことや知るべきことが優先される」と主張している。この記憶すべきことや知るべきこととして具体的に紹介されているのが、「奇跡の印、洪水、大嵐、地震、天界の超常現象、さらには発明や発見、国家や政治の変化、政権交代、戦争や講和に関わること、新たな法律や判決、官位・高位者に関わること」などである。さらにニュース内容の選択にあたって留意すべき点も述べている。第一は「通例のこと、当たり前のこと」、第二に「高貴な人々の内密」に関すること、第三に「公序良俗や神聖なる信仰に反すること」を避けるよう注意し、こうした事情が「ニュースが検閲される前に印刷することを禁じていた」ことを是認している。その一方で、人々の好奇心を満たすというニュースの役割が、「重大なニュースが不在の場合には些細な事や信頼性の低いニュースでも」求められる点に繋がることも指摘している。ここに記述した事柄は、今日のニュース価値理論と重なる部分が多い。

ニュースの形式に関しては、「経済性と語彙」というトピックスが述べられている。経済性とは「出来事の順番や配列」を意味し、「語彙は適合する語の選択」を示すらしい。ニュースという話の形式に関する記述で、イタリアの哲学者 Francesco Patrizi da Cherso⁴⁾を引用しながら、現在の5W1H（「誰が、何を、何故、どのように、どこで、何時」）を紹介している。キケロを参照しつつ、話し言葉や文学との対比から、ニュース表現には「純粋さ、明快さ、簡潔さ」が求められるとしている。ニュースは「民衆も理解し、教養ある者たちも褒める」ような表現であるべきと勧めている。

Peucer は、信頼性の点でニュースと歴史記述とを対照させている印象があるが、「歴史の目的が出来事の記憶を保存すること」で、いわば「後世のため」のものと言えるのに対して、ニュースは「人々の好奇心のためにまとめられる」ものと述べている。ただし、わずかだが両者の重なる部分もあり、それが「慎重さと深い思慮」であり、それがニュースに備えられる場合に、真実を叙述することを通じて歴史の一部となるという論法である。「ニュースの目的」について、Peucer は「新しい出来事の披露といくつかの利点や娯楽が結びついたもの」としているが、現在のインフォテイメントにも通じる捉え方と言えなくもない。この博士論文の最

後には、合計11名もの人々（医学関係者5名、哲学・神学4名、大学図書館長およびザクセン郵便庁の役人）が博士論文に対する祝賀を寄せている。

2 Kaspar Stieler (1695) Zeitungs Lust und Nutz oder: derer so genannten Novellen oder Zeitungen Wirkende Ergetzlichkeit Anmuth Nothwendigkeit und Frommen auch was bey deren Lesung zu lernen zu beobachten und zu bedencken sey?

本書は、ハンブルクの出版人 Benjamin Schiller により刊行された書物であり、現在参照できる初版の復刻版では「献辞」と「読者への前書き」を除く本文で165ページとなっている。巻末に詳細な人物等の索引などの補足が添えられている。全体は三部構成で、第一部（『第一の書』）が10章構成、第二部（『第二の書』）は12章構成、第三部（『第三の書』）が9章立てとなっている。参考にした復刻版には19ページに及ぶ『導入（Einleitung）』が掲載されているが、文責はジャーナリズム史の著作もある Gert Hagelweide と推測される。その記述によれば、Kaspar Stieler は1632年エアフルト生まれ、薬剤師を父に持ち、比較的安定した家庭環境に恵まれたが、ライプツィヒとギーゼン（1649年）、ケーニヒスベルク（1653年）、イエーナ（1662年）など何度か試みた大学修学は最後まで成就しなかった。家庭教師、軍の法務官や傭兵の経験後、伯爵貴族の宮廷に仕えたこともあり、大学秘書官も経歴に加えた。二度の結婚もあるなかで、バロック時代にドイツ語の純化活動に取り組んだことで知られる『実りの会（Fruchtbringende Gesellschaft）』にも招請されている。その間いくつかの作品として実を結ぶ詩作活動、文筆活動も経て、1694年暮れに滞在したハンブルクで本書を比較的短期間に執筆したと考えられている。尚、本書は好評を得て版を重ねたが、そのことが原因なのか、出版人とはそれ以降疎遠になっていることも述べられている。Stieler は寝たきり生活の後1707年に71歳で死去した（Stieler 1969, „Einleitung“）。

本書でも、ドイツ語の Zeitung という語が「印刷メディアとしての新聞」を意味することもあれば、単に「ニュース・通信」を意味する場合もある。Stieler の記述は体系性に則ったものとは言い難く、当時の新聞を巡る事情を思いつくままに述べていくという印象を持たざるを得ない。以下三部構成それぞれについて概要を紹介する。

第一の書では、新聞もしくはニュースの起源と古い時代のニュースについて、新聞の品位と重要性、新聞の多彩な命名と発言、新聞の素材・題材、新聞の読者、新聞を読み聞かせしてもらう者たち、新聞を読む目的と目標、新聞の蒐集者と発行者、新聞と理解できるものと新聞とは理解されないもの、新聞を攻撃する者たちへの反論などを主題として取り上げている。

新聞の起源については、Stieler にとっての直近の歴史的な重要事件であった三十年戦争期にその起源があるのではという推測も立てている（Stieler 1969, 12）。そしてニュースと歴史記

述との親縁性と相違点についても論じ (Stieler 1969, 14)、商人や商業交易が経済情報のやり取りによって新聞成立に寄与した点にも触れている (Stieler 1969, 15f.)。新聞の重要性や社会的意義に関連して、いかなる統治者であっても全知でもなく、あらゆる場所に立ち会うことが叶わないこと、臣下からは主観的情報がもたらされやすいことなどから、世の動きに関する客観的情報源として不可欠だと述べている。また、新聞に対する様々な名称を否定的なものも含めて羅列して見せている (Stieler 1969, 26)。また、Stieler は「新聞は、ときに真実で、ときに推測の出来事のお話を印刷したものであり、いかなる秩序立ても判断も無く、読者の好奇心を満たし、世界の採め事を告知知らしめることを目的としている」(同上、26) という定義も与えている。新聞の素材は、「世界で起こっていること」で、新しいことに限られるとも指摘している (Stieler 同上、29)。

新聞が与えうる否定的な影響は、「君主たちの名誉を傷付け」ること、また国を安定させることも不安定化させることもあり、拳句に反乱や絶望を引き起こすかもしれない」(Stieler 同上、32)。新聞が虚偽の内容を刊行する可能性もあるが、それに対しては「収監、罰金、没収、追放」などの刑罰も発行人には威嚇として働いている (Stieler 同上、33)。ドイツの新聞に外国語表現が多用されることは軽侮の対象にもなっている。Stieler は、聴覚や視覚に障害のある人もそれぞれの工夫でニュースの内容を知りたがっていた様子も紹介し (同上、38f.)、誰が新聞を読むべきなのかという点について、戦時に情勢判断をすべき統治者にとどまらず、読者の限定に否定的な意見を述べている (Stieler 同上、40)。新聞購読の利点としては、新聞こそが神の栄誉の拡散に寄与すること (因みに福音の英語訳は Good News である) をとらえるなど、この書でも宗教的解釈や結び付けが時折顔を出す) にも触れながら、この世の出来事を知ること、言葉を知ること、気晴らしになることなどを挙げている (Stieler 同上、44)。Stieler は新聞制作者である郵便局長 (かれらこそニュース流通の主体であったから) についても言及している。彼らが郵便という流通経路にニュースを載せ、またそこからニュースを取り出し、新聞の形で制作する役目を負っていたからである。彼らに対して Stieler は入手できるニュースをすべてそのまま流通させぬよう一定の用心深さを求めているのである (Stieler 同上、48)。その注意点は、情報の客観性・正確性と一連の禁忌に触れないこと、本当のニュースを手に入れるには金を惜しまないこと、あくまで真実を追求すること (これも「真実を愛する神」との関連で語られるが) などに向けられている (Stieler 同上、48ff.)。

新聞との類似性を有するものとして、奇しくも Zwierlein (2006) がこの点を実証的に主張しているように、歴史記述と外交使節の報告が挙げられる一方で、新聞とは異質なものとして、地方を巡回して路上で売られる印刷された歌や風刺 (一枚刷りとかチラシとされているものの一部) が挙げられている (Stieler 同上、54)。また、「省察 (Reflexiones)」とか「回想 (Rückgedanken)」と称する事件の発生後しばらくしてから刊行されたものも新聞の派生的刊行物ではあるが、新聞とは見なせないとしている。理由は、その内容が事件に関するコメント

や論評で、往々にして非難や誹謗となるためらしい (Stieler 同上 54f)。

第一の書の最後に論じられているのが、新聞攻撃に対する反論である。つまり当時新聞に対する攻撃のきっかけとなった虚偽報道、誤報道、それほど重要性のないニュースの掲載、さらには神、法、道徳に反する報道について、新聞制作者がなし得ること、なさざるを得なかった事情を指摘することで理解を求める文章となっている。例えば、ニュースは第三者がとりまとめたものであり、事実関係を確認する術をもたず、それをそのまま掲載するしかなかった状況や、毎週発行というリズムの中で常に重大事件が発生するわけではないことなどを指摘している。また記事の内容に不道德なものが混じることも、聖書ですら内容上は同様に「近親相姦、不倫、窃盗など多数の悪事」が記されていることで、目的上やむを得ないとしている。無論、意図的な誤情報は論外とされ、また、新聞制作者にはさまざまな罰により箍がはめられていたことにも触れている (Stieler 同上、56ff)。

第二の書は、新聞自体の必要性和有用性をタイトルに掲げている。読者が商人、宮廷人士、(非常時ともいうべき状況にある) 不遇な人、女性の場合、状況としての戦時や国策検討の場合、また購読の場としての教会、大学、家庭、旅行中、酒席や会合それぞれについて、新聞の有用性が述べられている。

まず商人の場合、いわば一般的な市場情報としての産地、特産品、流通経路、市況、豊作・不作などをほぼ世界中の範囲で承知しておく必要がある。Stieler はドイツ語圏のワインやビール、大根のみならず、モスクワ、セイロン、ホルムズ (現オマーン)、メキシコ、ブラジルの名産品まで挙げて、当時すでにヨーロッパ経済が世界規模での取引による商圈を構成していることを図らずも示している (Stieler 同上、68ff)。さらには、支払いにつきものの通貨制度やバーター交換に関する情報にも触れている (Stieler 同上、70f)。こうした新聞情報による基本知識によって商売や取引につきものの詐欺など (一見派手な衣装や外見、大口の購入などで欺く手口) も見抜く能力がもたらされるとしている (Stieler 同上、71f)。また、戦時などの特殊な状況で市場が受ける制限についても承知する必要がある点にも触れている (Stieler 同上、72)。

次に宮廷の人々、すなわち統治者集団は、基本的に君主とその一族、そこに仕える廷臣たちから構成される (Stieler 同上、73)。君主は、戦時、平時を問わず同盟関係、敵対関係等領地の安寧や維持に腐心することから、常時臣下にニュース (手書き通信もこれに含まれるが印刷新聞が手軽) を読ませ、それへの対応を検討する必要がある (Stieler 同上、74)。廷臣たちは、位を問わず新聞によりニュースを承知し、理解することの重要性を指摘している (Stieler 同上、76ff)。

戦時においては、平時にも増して情報が情勢を左右することは言うまでもない。Stieler も指摘するのは、指揮官が自軍の状況 (糧秣、水、薪など) のみならず、敵の状況について正確な情報を入手する手段としての新聞・ニュースを重視すべきだということである。もちろん、

スパイなどによる情報も必要である。情報戦という点では、逆に新聞を利用した謀略も採用されたことを指摘している。変わった点では、学のある兵士であれば、新聞は暇つぶしや会話のきっかけに使え、自身を情報通として上官に売り込むことで、昇進にもつながる可能性に触れている。また、新聞の内容には、さまざまな戦法や用兵の具体例が取り上げられ、兵装や武器に関しても伝えられることがあり、情報の確度の点でも中立の新聞の意義が強調されている。講和の場合にも、情報戦の場としても新聞の重要性が無視できないと指摘している (Stieler 同上、80-86)。

Stieler は、新聞と教会に関連して、当時の礼拝中に新聞を読むような信徒のみならず聖職者にもいわばニュース中毒がいたことを非難している (Stieler 同上、93)。とりわけカトリックのイエズス会士のように上流社会や布教の関連で世界各地とも関係し、情報に関心を持ち、情報流通の主体でもあった場合もあり、聖職者など教会の関係者は、日々の牧会のためにもニュースを承知して世情に通じているべきであると述べている (Stieler 同上、86f.)。また、新聞のニュースにも、ユダヤ人に関わる政策や新教徒の反乱、フランスでの改革派を巡る動き、カトリック教会内部での敬虔主義、同じカトリック国のフランス軍によるイタリア略奪など、宗教に関わるニュースには事欠かないと述べている。

大学の教師や学生の場合、学ぶ学問と社会の実践との関連からニュースへの関心を持つべきであると述べている (Stieler 同上、94f.)。具体的には、神学、法学、医学・薬学、哲学が挙げられている (Stieler 同上、95f.)。

17世紀であったにも拘わらず、女性が「軽薄、知ったかぶり、おしゃべり」だとする偏見が誤りであることを Stieler は指摘している。こうした偏見から女性には新聞を読ませるはならないという考えもあった (同上、97)。これには男性同様身分や職業 (「村の人々、侍女、普通の家の娘たちには裁縫や紡ぎ仕事がよりふさわしい」) が関係するという見方に対して、時代が変わり、女性も「外部の出来事について語り、新聞でそれについてどう語られているのか話す方がよい」と Stieler は述べている (Stieler 同上)。こうした考えの延長にあたるためか、家庭内での新聞購読も取り上げている。家長たる者は世の動きに注意を向け、その上でその後の行動の指針を立て、歴史や教訓を学ぶのだが、そのためには新聞が必要だとされ、また家長自身も「新聞を利用して好奇心を満たす」 (Stieler 同上、102) こともある。具体的には、防犯の重要性を悟らせる犯罪や居住地近辺の戦況に関する記事が挙げられている。新聞は保存し、年間の新聞を製本させる場合もあるのは、そうしたことが背景にあるとしている (Stieler 同上、103)。

Stieler は、非日常的な状況のケースとして、旅行者と逆境にある人などを挙げている。旅行者が困難を含めて多様な経験をすること、旅行者にも旅行先 (大航海時代に伴い地球規模にわたる) や目的 (商用、遍歴職人、政務、学生からスパイまで) によりさまざまな場合があるが、そうした中で、とくに戦時などで新聞による客観的な情報が必要であると論じる。極端な

場合では、遠洋航海中の長期の情報欠落が運命を左右すること、フランスのユグノー達のように海外に亡命する者たちにとってのニュースの重要性を述べている。最後にはレーゲンスブルクでの帝国議会出席の使節もこの範疇に含めて、情報の重要性を強調している (Stieler 同上、107)。

戦時の難民のように、逆境に陥った人々が渴望するのが少しでも肯定的なニュースであり、それは囚われの身になったものでも、毎週読めるものではないものの新聞があれば慰めになる (Stieler 同上、108f.)。また、痛風、結石、水症などの病気の人が新聞で気を紛らわせることができること、また時には病気で仕事や任務の現場から離れているがために、新聞により状況をより客観的に観察できることも指摘している (同上、109f.)。また貧しい者が新聞のニュース購読の際に、ドンキホーテの小説同様に英雄に自身を重ねることもある (Stieler 同上、110)。

宴や会合の場でも新聞は必要で有用だと Stieler は言う。「職人が自分の専門技能について一時間もおしゃべりできないのなら、それはできの悪い職人だ」という格言をもとに、Stieler は新聞がその内容の多彩さや世界規模の題材から、人々にとって格好の話題提供となることを論じている (Stieler 同上、112)。新聞で報じられる社会の出来事を知らずに過ごせば、それは永遠の監獄生活を送ると変わらないとまで主張する。なぜなら人と動物を分けるものこそ会話であり、酒の席で心地よい会話が音楽や酒以上に役に立つからだというわけである (Stieler 同上、113)。しかし、ニュースでも新しいものでなければ喜ばれない上に、ニュースの信ぴょう性に問題があればそれで笑いものになってしまう恐れもある (Stieler 同上、113f.)。もちろん、その席にさまざまな立場や信条の人物がいるのかは予見できないのであるから、話すニュースやそれに対する判断をたやすく話すべきではないこと、ニュースを話題にするにしても本当に詳しく知らないことを論じるべきではない点も強調している (Stieler 同上、115) が、これ自体はニュースとは無関係の余談であることも認めている (Stieler 同上、115ff.)。

Stieler によれば、「新聞はいろいろな学問や技芸への道標である」 (Stieler 同上、117)。新聞を読めば、「わずかな代金とひと時の時間で、一か月最良の学者の下でよりも多くのこと学ぶことができる」とも言う (Stieler 同上)。高名な賢者が言うに、「世界の出来事が日々我々を賢明にし」、「新聞は世界を解剖して見せてくれる」 (Stieler 同上)。ただし新聞のニュースも玉石混交であり、読者の持つ関心興味もさまざまで、若い読者には案内が必要となる (Stieler 同上、118)。どうすれば新聞を正しく利用できるのかについては、上にも紹介した Weise が指摘する新聞報道の犯すべきではない危険 (国家や君主の機密など) を避けながら、出来事の原因に着目し、その影響を見抜こうとすべきとしている (Stieler 同上、119)。Stieler は具体的な複数の所領相続紛争やフランスとオスマントルコとの外交を紹介しながら、複雑な背景なども承知しなければ新聞ニュースを適切に理解できないことを、政治に熱心な者

を対象に強調している (Stieler 同上、120)。

最後の第三の書では、いかに新聞を読むべきかが記されている。Stieler は、まず「新聞はじっくり全てを読み切るべきで飛ばし読みすべきではない」とし、ニュースの発行地や日付、内容に注意を向け、同じ事件の以前の記事の内容を覚えておく記憶力も必要だと述べている (Stieler 同上、123f)。この続報に注意を向けることでニュースの内容について確認ができることを踏まえていれば、一時の妄信を防げるので、ニュースは検証しつつ読むべきものとしている (Stieler 同上、126)。したがって、新聞やニュースの内容については疑ってかかるという姿勢を強調し、「よい記憶力」や「地理的知識、(支配者の)家系図、旅行記、航海記録、外国語の辞書」などをいわば予備知識として必要だと勧めている (同上、127)。そして第2章以下で「現状のヨーロッパ」の支配者に関する情報、「統治者の家系と家紋」、「世界の地理」情報、「外国語の知識」、「政治的常識」を順に論じている。最後に本旨から逸れる点であるが、「どのようにニュースから歴史を編成するのか」、「新聞に関する法規と誤情報に対する罰則」についても筆を進めている。

新聞のニュースを読む上で必須の知識とされるのが、君主たちの家系や個人の確認だと述べている。君主とても代替わりするのであり、君主家系での生誕や死亡の名前はすべて承知していなければならないというのが Stieler の考えである (Stieler 同上、128)。同一家系でも複数の有名人を輩出した例、貧しい家庭や無名の家系出身の人物のケースが紹介されている (Stieler 同上、129)。そうした場合、教皇や皇帝、国王の名前はもちろん、地域を統治する君主たちが誰なのかをも、時間の経過とともに継続して承知する必要がある。新聞に報道される高貴な家系の冠婚葬祭や公職就任、爵位で個人が特定される名前などが触れられないこともあり、大家族の場合は傍系を含めてどの人物かを特定できなければならないからである。また Hartnack や Weise にも触れつつ、新聞を読みながら独自に人物に関するメモを取ることを勧めている (Stieler 同上、131f)。「村の農民たちが神父や収税官吏が辞めると後任者に誰が提案されるのか、あるいはすでに選ばれているのかについて頭を寄せ合って相談する」のと同じことを勧めているのである (Stieler 同上、132)。また、その延長線上で、著名人の家系論のみならず、紋章論も必要だとしている。オスマントルコの月、フランスブルボン家の百合、ハプスブルク家の鷲のようなシンボルも承知していなければ、新聞に記されるこれらの比喩も理解できない (Stieler 同上、132f)。家系論についてはドイツ語圏とフランス語圏の境を超えた婚姻政策も例に挙げて、「間違いなく言えるのは、有力な諸侯の家系を十分承知していなければ、新聞を正確に理解できないということ」を強調する (Stieler 同上 133)。「高貴な家系の人々自身、だれが自分の親戚なのかを知らないことも多い」という事情もある (Stieler 同上、134)。しかし「新聞の読者は、たいいてい事情を承知しておくこと、新聞から承知できることを個人の知識として備忘録に留めておけば十分である」というのが Stieler の見解のようだ (同上)。こうした背景知識はとりわけ新聞の政治的事件とその登場人物たちの縁戚関係の理解

に資するもので、実際「ドイツの諸侯で多くの系統に枝分かれしていない家系はほとんどない」という現状を Stielер は指摘している (Stielер 同上、137f.)。

Stielер はまず地名と地理的情報とが結びつかないと、ニュースが理解できないと指摘している。ニュースに出てくるのは、川、町、村、山や谷のような小さな場所の名前であり、これはニュース理解の妨げとなる。地図や海図は役に立つのだが、世界全図のようなものにはこうした細い地名は見つけられず、地域ごとの詳細図の方が確認できるかもしれないし、そうした地名はニュースで初めて知るものも多い。「水害、災害、火災やペスト、飢饉などの不幸な事件」で、地名について承知するのである (Stielер 同上、141)。フランス軍の戦闘や冬の宿営地に関わるニュースなどを例に、位置や距離などの地理情報の無知は軍事情報の判断を誤らせることも紹介している (Stielер 同上、139f.)。そうした点で、「都市、城、砦」の銅版画も新聞理解に有用だと述べている (Stielер 同上、142)。

さらに、新聞を読み、「その時点で起こった事件を理解するためには歴史知識が極めて必要」というのが Stielер の主張である。「歴史に長けた人々でなければ、新聞に掲載された出来事の原因を知らない、あるいは推測もできない」ことがある (Stielер 同上、143)。神聖ローマ帝国内の諸事件、オスマントルコを含むヨーロッパ内外の政治的事件や情勢に関するニュースを例に織り込みながら、「前史を承知していれば、あらゆることの正否を論じたり、断じたりすることは難しくはない」と言う (Stielер 同上)。また、「歴史でも新聞でも党派性に引きずられた記述には事欠かないが、疑わしい記述者ばかりを信用してはならず、対局側の記述も読み、それに耳を傾ける必要がある」としている (Stielер 同上、144)。歴史的な知識と並んで重要性が指摘されているのが、ラテン語で刊行されていた雑誌や著作、最初の定期性が認められている見本市通信 (直近半年の重要事件を整理して解説したもの) である (Stielер 同上 146f.)⁵⁾。

Stielер は外国語を習得し、意のままにできるようになるのには何年もかかるが、ラテン語を学べば、その親縁関係にあるフランス語やスペイン語、ロマンス語諸語は数か月で学べる。新聞を正しく読むために、「新聞に出てくる外国語を読み、理解することを求められるのは避けられない」 (Stielер 同上、148)。また新聞を読み上げる機会もあり、外国語の単語を理解するだけでなく、声に出して読めなければならない (Stielер 同上)。とくにフランス語の単語の頻度が高くなる (Stielер 同上)。例えば、宮廷ではラテン語や、他の外国語の即訳が求められるが、それができれば出世にもつながるといった話が紹介されている (Stielер 同上、150)。いわばマイナーな言語であるポーランド語、ロシア語、ハンガリー語、トルコ語の場合も紹介されるが、こちらは学習するまでの必要はなく、よく使われる語を承知すれば事足りるとしている (Stielер 同上)。さらに、外国語ではなく今日の専門語 (軍事情報用語や航海用語) に関わる現象も取り上げ (Stielер 同上、150f.)、新語も登場することなども紹介している (Stielер 同上 151f.)。

Stieler が新聞を的確に読むための要件として最後に挙げたのが、政治的理性というものである。「政府高官や公的業務に勤しむ人々は政治的な理性を持たねばならない」が、同じことが本来新聞の読者にも求められる (Stieler 同上、153)。「新聞を読むことで、賢く、才知に富むようになろうとする者は、不注意な読み飛ばしをせず、歴史や前もって見聞きしたことから原因や状況を記憶に呼び起こしながら、自らの考えを持たねばならない」(Stieler 同上)。例えば、ある大軍が話題になっても、その募兵時の状況や予算がどれほど認められたのかなどを政治的理性のある人間であれば調べるのである (Stieler 同上、154)。一般的に、政治的理性は「省察 (Reflexion) とも呼ばれる政治的な熟慮」により一種のバランスの計算法を駆使して結論を導きだすものとされる (Stieler 同上、156)。この点を Stieler はフランスの戦争介入の見通しやスイスの傭兵契約や外交を例に説明している (Stieler 同上、157f)。バタビアを巡る英蘭の争いでも、歴史的経緯とその継続としての事件の新聞報道との関連を踏まえなければならないとする (Stieler 同上、159)。結局、世界の政治に関わる事の正否を断じる術を我々に教えてくれ、「新聞こそがもっとも世知に長けた如才ない人間をつくるのだ」(Stieler 同上、159) と強調している。

第三の書は、新聞を読むための要件からは外れた二つの点が最後に取り上げられて締めくくられている。第一に、新聞と歴史との関係である。Stieler は「新聞から歴史を書くのは容易ではない」理由を、「新聞記事がバラバラに掲載されてまったく秩序が認められない」だけではなく、「新聞 (の内容) が往々にして信頼できない」ためとする (Stieler 同上、160)。ただ、Hartnack の言う「ニュースが歴史の最初の基盤を与える」という点は評価し (Stieler 同上、160)、見本市通信と *Diarum Europaeum* (Stieler が歴史記述とみなす刊行物) などは、ニュースの記述無しには書けず、逆にニュースがあれば詳細な歴史も可能だと主張する。そうした関連で、Stieler はニュースを宗教・聖職者に関連すること (教会に関わる情勢や聖地などを巡るトルコ側の動きまで)、国家と統治者に関連すること (有力諸侯の結婚、生誕、死去などの家系の異動や軍事・外交)、自然現象に関わること (火災、天災、洪水、地震、火山噴火、天文現象、動植物や人間の奇形、金銀を始め、硝石、塩等様々な鉱物資源や発明)、法律関連 (いわゆる自由技芸を含む) の四分野に分類することを提案している (Stieler 同上、161ff.)。

最後の点が、新聞の誤報と取り締まりである。新聞制作者に求められるのは信用と誠実さであり、それに対して権力者の保護が与えられるべきという Stieler の理想論の背後に、単純に転載、複製するだけのニュース (Stieler 同上、164f.) と、肉屋郵便 (Fleischerpost) 等の民間郵便による「誤った、嘲笑的で有害なニュースが広まる」現実を認めている (Stieler 同上、165)。そのために、Stieler は「間違った情報の拡散者は神や隣人に罪を犯す」者と捉え、罰金や公的地位のはく奪などを課すのは当然と述べている (Stieler 同上)。とくにニュースの内容が名誉を毀損し、中傷する表現を含む「誹謗」となって、ときに「不敬」にあたる場合は、

事の真偽とは別に裁判にかけられるべきとしている (Stieler 同上、167)。軍事的なものも含め不利なニュースを領地外に伝えることにも極刑を含め厳しく対応すべきとし、君主の周辺がニュース源であっても、誤報・虚報のみならず、伝えるべき情報を伝えないことの罪も論じている (Stieler 同上、167ff.)。

最後に Stieler は、ニュースにも印刷、手書き、口頭という三つのチャンネルがあることを指摘し、基本的にニュースに対して地名、人名、数字などの点で正確であるべきという主張で本章を閉じている (Stieler 同上、171)。

3 Wilke による総括

第1章で紹介した新聞・ニュース論を編集したメディア史研究者 Wilke は、以下のような総括を与えているが、これはほぼそのまま Stieler の著作内容にも当てはまる。

- (1) 印刷情報メディアが登場した際にも確認された賛否両論がここでも展開され (Wilke 同上、39)、同様の議論が映画、ラジオ、テレビなどでも繰り返されている (Wilke 同上、41f.) が、新聞の存在意義を正面から否定する識者はいない。
- (2) 時代の制約と理解されるものの、報道の自由を支持する論調は見られない。逆に、誤報や虚報を根拠として「権力者による管理としての検閲を正当化」するが、それは「絶対主義的政治システムや機密政治を維持する (権力者の) 要請に一致する」 (Wilke 同上)。また「基督教的倫理の有効性が確固たるもの」と前提とされている (Wilke 同上)。
- (3) 「著者たちを駆り立てている重要な動機に教育」があり、「意図的に新聞を教育手段として取り上げ」 (Wilke 同上) ているが、それは一方で新聞購読に対する限定を正当化する場合も、利用の有用性を論じる場合の目的としても使われている。
- (4) 新聞成立の「人類学的、社会学的根源として、人の持つ好奇心と社会的共同生活、(主に制作する側の) 経済的利害」を指摘している。Stieler はこれに、「無知がもたらす失敗への不安」を加え、その不安の根源を読者の多様性に対応させている (Stieler 同上、67)。
- (5) 新聞の機能として「教育、知識の媒介、指針の提示、そして気晴らしや娯楽」にも言及している (Wilke 同上、40)。
- (6) 著者たちは例外なく「新聞における意見表明に反対する議論を提示していた」 (Wilke 同上、41)。Weber (1993) は、新聞に政治的なコメントを記すことを始めたのが Hartnack であり、彼が 1687 年以降編集していた „Relation aus dem Parnasso“ が、競合紙との違いを鮮明にして購読者の獲得を意図したためだとしている。

上記の諸点以外にも、Peucer が、ニュース価値理論に繋がる発想を始めして、ニュースにまつわる信ぴょう性の問題、ニュースソース、5W1H で象徴される報道ニュースの構造な

ども論じられている (Wilke 同上、40)。

4 新聞普及の意義と読書行為の変質の帰結

同時代人の新聞に対する見方や評価を踏まえ、新聞が17世紀以降のドイツ語圏、さらにはヨーロッパ全体に普及した事実がもつ意義をどう捉えるべきであろうか。社会で起こるさまざまな出来事については、一般には口頭で、ごく一部の識字層では手紙や印刷物(新聞に先行した印刷物としてのチラシやパンフレット、見本市通信等も存在した)でも語られ、伝えられていた。そうした数々のチャンネルに対して新聞が持つ優位性は、定期性、速報性、簡易性、経済性の一体化と考えられる。駅通のリズムに合わせて一週間に一度、現実世界の最新の出来事に関する情報が、読みやすい形態で、しかも比較的安価で容易に社会に拡散する影響が何だったのかは興味深い問いである。

〈ニュース伝達の口頭性から書記性への転換ないしは書記領域の拡大併存〉

もちろん新聞というよりも文字の導入や活版印刷の普及こそが、口頭コミュニケーションに対して、そもそも書記体系による情報伝達を導入したという点で、その質的意義はより根本的であると言えよう(オング1991参照)。ただ社会の構成員全員にとって書記体系が開かれていたわけではなく、当初は甚だしく限定的であった。17世紀初頭時点のドイツ語圏社会として見たときには、新聞誕生以後もしばらくは口頭での伝達と書記による伝達が併存し続け、この併存活用は部分的に現在に至っている。17世紀初頭での状況は、書籍による情報伝播が社会の知的階層に向けられていた。当時の書籍の主流はグーテンベルク聖書が典型的に示す通りラテン語で印刷されていたのに対して、新聞(チラシの場合も含め)は、初期のものでも3桁の部数を発行しており、読み聞かせの手段(ドイツ語でいう »lesen hören«)も手伝って、書籍(やパンフレットなど)の長い活字テキストとは比較にならないほど伝播の対象が広範なもの、非識字層をも取り込むものとなったと考えられる(バーク同上、253)⁶⁾。このオーラリティ(口頭性)からリテラシー(書記性)への転換もしくは後者の拡大、あるいは両者の連携がもたらした第一義的な意味は、伝達の際の時空間上の制限が、大量複製によってさらにもう一段取り払われたことである。どこにしようとも、書かれた時点と読まれる時点との間にどれほど時間差があろうとも、また一人でも識字能力のある者がいれば、書かれたものや印刷されたものさえ手元にあることで、発信者からのコミュニケーションが成立する。この時代は、個人がばらばらに書記情報の消費をできるまでの中間段階という重要な意味があったといえよう。リテラシーの領域それ自体として書記情報が広範な受容者を見出すには、18世紀以降の義務教育の徹底を待たねばならないからである。オングが指摘する声の文化の特性の対極が、自動的

に文字の文化としての書記体系の特性とは認めにくいところもあるが、例えば「分析的かつ従属論理的」、「冗長ではなく簡潔」、「客観的、距離感のある」、「状況から独立的かつ抽象的」な性格などは⁷⁾、新聞のような公共コミュニケーションとしての印刷物にはそのまま当てはまるものと考えてよさそうである。有限の紙面に、誰にでも、理解しやすく、簡潔かつ論理的に物事を伝達することが求められているからである。ニュースの伝達という局面では、声と文字の二つの体系は、「密接に協働して作用する」(Böning 2005, 107)。すでに16世紀から売り子が歌を歌いながら、あるいは口上を朗々と述べながら売られた一枚刷りともいわれるチラシの販売もそうした現象に数えられるであろう。チラシは図像が多用されることが多く、それは口上に含まれる言語情報を頼りにいわばイラストで理解できる構成になっている。もちろん、一般的にはごく普通に新聞のニュースを自ら読めた人が新聞を購入できない人、識字能力の点で読めない人にも口頭で内容を伝えることが考えられる。それは当然起こりうることだったのであろうし、現在まで日常的に繰り返されてきたことでもある。

〈認識の対象の物理的拡大〉

印刷された新聞も手書き通信もニュースを伝えたものである。Bentele et al. はニュースを「…理念的には中立的に、世論にとって関心のある最新の出来事を簡潔な形式で伝えようとする」ものと規定する⁸⁾。先に Peucer も指摘した通り、当時から定式化したニュースの構成は、出来事の重要な事項に関する問い(誰が、何を、何時、どこで、どのように、何故、情報源は何か)に対する簡潔な回答を提供する形をとっている。それまで、都市や村落などのいわば小規模な共同体世界に生活圏が限定されていた多くの人々は、ニュースによって個人がもつ肉体的、社会的限界を超えた領域の事象についても、比較的新しい出来事を通じて、自己の現実認識を拡大、変容させていく。新聞は、このプロセスを日常的に始めたものである。受容者個人の現実理解は、身体的、物理的に限界づけられる。社会的に踏み込めない領域も含め、その外側の現実をニュースによって知り、双方を共に継続的に繰り返し認識する術を持ったことになるからである。一次的、肉体的現実認識に加えられた日常的「メディア現実」の登場である。

〈資本主義的精神の発生と識字〉

奇しくもほぼ百年前の1920年、世界的に流行したスペイン風邪で没したマックス・ヴェーバーは、その著書『プロテスタント倫理と資本主義の精神』(原著1904/1905)で、自らは禁欲的な生活を送りつつ、ひたすら資本を蓄積、再投資して拡大することを自らに課し、是認せざるをえなかったカルヴァン派やピューリタンの宗教的価値観に近代資本主義の精神的原動力を見出した。ヴェーバーは新教徒、旧教徒の職業分布を手掛かりに論を起しているが、こうした認識の重要な前提とも、裏付けともとれるように、一部の識字率調査では新

教徒地域と旧教徒地域との明白な相違も確認されている⁹⁾。もちろん新教徒は自ら聖書を読めなければならなかったからである。カトリック教徒の場合も、「14世紀末から15世紀のDevotion modernaのようなカトリック教会内の宗教改革運動で、すべての信仰者に聖書を読むよう促し始めた」ように「大衆の識字向上」の動きがあった(Buringh/Van Zanden 2009, 423f)ものの、長らく聖職者から聖書の内容・解釈を一方的に受容する立場が普通であった¹⁰⁾。Buringh/Van Zandenは、15世紀の活版印刷発明前後の時期から19世紀にかけての書籍産業成長の要因として、手書き時代に贅沢品であった書籍の価格低下、大学増設とも結びついた都市化(人口1万人以上の都市部人口の全人口に対する比率増大)による書籍市場の成立、大学増設が示す識字率や就学率の上昇と並んで、プロテスタンティズムの勃興に着目して、「プロテスタンティズムの勃興は識字率に強烈な影響を与えたという印象がある」と述べている(Buringh/Van Zanden 同上、442)

この両宗派の相違は、ドイツ語への聖書翻訳に対する取り組みの正当化や認知の違いにも表れている。ルター聖書が広く新教徒に受容されたのに対して、ラテン語聖書に固執したカトリック側に対応するものは登場しなかった¹⁰⁾。当時の両宗派の相違を単純化すれば、聖書というそれまで閉じられた精神世界を、旧来の固定された視点からの理解を受容するのみの立場と、現実世界の現象が孕む矛盾や問題を踏まえて主体的、合理的に理解しようと試みる立場の違いと言えるかもしれない。ちなみに、Stielerは、聖職者がニュースの内容を承知した上で説教壇に上がることを勧めている(Stieler 同上、87)。その上で、新聞という現実の世界を切り取った最初のメディア現実を共有することにより、しかもそれを日々(当初は週に一度)繰り返すことで、いわば拡大変容した世界観や価値観を社会全体に流布浸透させる働きが新聞にはあったとも言える。とりわけ、市民的公共圏の議論の中心となる政治的世論といわれるものを、新聞や雑誌が17世紀から18世紀後半に形成していく過程を指して、Böningは「新聞が17世紀のメディアで啓蒙主義の時代の下地を創った最も重要なものとみなせる」(Böning 2008, 294)と主張し、典型的かつ具合的な事例として、1637年の記述で「新聞によって平民が君主を批判することを学んだ」とまで言われたことを紹介している(Böning 同上、297)。Böning(2005)の論証によれば、新聞自体も地理的、量的に拡大し、雑誌も数千を超える多種多様なものが登場する。当初論評の許されなかった新聞の現状を逆に機会ととらえ、新聞について論評、解説する雑誌まで登場し¹¹⁾、ほぼ二世紀にわたりゆっくりと政治的公共圏を形成したのであり、その出発点が17世紀初頭の新聞誕生だというのである(Böning 同上、297)。

こうした書籍、雑誌、新聞等の印刷メディアの細分化、専門化、そしてそれらの社会的機能の明確化と機能分化、さらにはそれらが社会のなかで協働、共棲しそれぞれの個別の役割を果たしつつ、全体として巨大な認識上、思想上の潮流を生み出した事実は、あたかも人類が最初の道具である石器を偶然発見、利用し、以後意図的に機能別に精緻化させていき、生活に役立て、社会全体の統合や進化をもたらした過程をも想起させる。人類最初の公共メディアとも言

える印刷新聞についても、その「道具としての発展」は人類の社会生活そのものの変質に繋がったという印象を受けるのも穿ちすぎではなからう。

〈読書様式と読書内容の変質と拡大〉

エンゲルジンは、読者史・読書史の観点から「それまでの集中的な繰り返し読む行為」に、18世紀以降主流となる「広範な一度切りの読む行為」を対比させる。新聞購読はそれまでの聖書などを中心とした教訓的読書同様「定期的で繰り返しの」という共通点はあるものの、一言一句不変の聖書、聖歌などとは異なり、新聞購読の内容は毎回テキストが新しくなると同時に、同一のテキストは通常一度しか読まれない (Engelsing 1970, 973f.)。エンゲルジンは具体的な人名を挙げているが、新聞成立前後の同時代にはケプラー、ガリレイなどにより近代科学の基礎であり世界認識の基盤が築かれ (Engelsing 1970, 975f.)¹²⁾、近世まで (部分的には現代まで) 人々の霊的な世界、精神世界を規定していた教会の教義 (Dogma) とそこから派生するイデオロギーに矛盾、対峙するものとなっていった。こうした内容を、主として現実起こった事件などを踏まえるかたちで、新聞は繰り返し読者と広義の受容者に普及、吸収させてきた。とくにカトリック教会の教義は、すでに16世紀のパムフレットという印刷メディアを巧みに活用した宗教改革者たちによっても根本から問いただされ、揺らぎ、相対化されていった。

印刷新聞のみならず、手書き通信で伝えられたニュースも、上でも触れたように権力者の監視の下で論評・コメントが避けられていた。駅通に乗って伝えられた事実報道のみであれば、最悪「そのまま掲載した」という言い逃れができたという事情もあった。新聞史研究者の Johannes Weber はこの点を簡潔に「(記事内容を) 分類せず、編集せず、論評せず」と称している (Weber 1990, 23)。これは検閲の圧力で一見報道の自由が実現できていない欠点ととられがちだが、論評抜き的事实報道限定という便法が、現実認識の拡大という文脈では、逆に自由な認識の流通を促進することになったのではなからうか。そして人間には、個別の命題の組み合わせから推論を行う能力があることを忘れてはならない。哲学や言語学語用論に発話行為理論という領域があるが、文字通りの意味には取られない発言 (発話行為) を間接発話行為という。こうした概念を成立させる前提として会話の公準というものがあり、われわれは無意識のうちにそれに準じた言葉の使い方をするという観察がある。むしろ、日常生活では言語表現と意図した内容とが複数の結びつきができるように柔軟に組み合わせられ、使われている。言葉の受け手も、言語表現上顕現されていない意味上の推論と帰結を頭の中で行うことが頻繁にある。A という言明と B という言明から C という言明を文脈や社会常識を基に生み出せるのであり、その推論の部分を権力者が監督、管理することはできない。Stieler もそれを指して「新聞の読者は、仮に彼を打ち殺したとしても、皇帝ですら防ぎようのない考えを抱くものだ」と記している (Stieler 同上、156)。

読書行為の様態の議論以上に重要なのが読書対象、読書素材の問題である。パーク（2004）は、主にヨーロッパ社会で知識が生じ、伝承、普及する歴史的展開を知識社会学の知見を踏まえて叙述しようとした。印刷術は、「異なる地域の人びとが同一のテキストを読み、同一の図像を調べることができるようになったおかげで」知識を「標準化」した（パーク 2004、22）。その中で雑誌や新聞を「情報の商品化のもっとも明らかな事例」であり、他の歴史研究者同様「ニュースはすでに商品とみなされていた」と述べている。

それ以前の知識の商品として圧倒的に消費されていたのは聖書である。読書行為の対象としても、聖書と関連の教会関連刊行物は一種の独占状況にあり、しかも教会という財政的に堅固な組織が顧客として購入したために、印刷業者の経営を支える柱でもあった¹³⁾。そうした点を踏まえ、知識と情報が不可分な連続体であるとするれば、17世紀ドイツの主要な知識消費を大きく聖俗二つ（heilig/sakular vs. weltlich/säkular）に分化させたのが新聞という媒体の役割だったのかもしれない。チラシなどの他の印刷物をあえて顧慮しないのは、これらは定期性、連続性という共通点に欠けていたためである。聖書や教会系出版物は日曜日には必ず読まれたのに対して、新聞も週に一度（曜日はそれぞれの都市の駅通局によりさまざま）配信され、読まれた。Böning は、カレンダーと並んで「17世紀中庸には新聞が最も重要な世俗的読書対象であり」、「あらゆる世俗のテキストへの道を開いた」とまで指摘している（Böning 2005、112f）。暗黙の前提としてこの指摘は、読書の対象としてそれまでもっとも重視されていたのが聖書や教会関連の印刷物であったことを指しているが、それらはジャンルと言うならばもっぱら「教訓的テキスト」（Erbauungsliteratur）であった。そうした自己や現実と隔絶された世界の描写で自己認識が切実に問われることは、多くはないのではないか。「新聞は事実に関する情報を伝え、世界に関する知識とそれに対する（いわば他者）理解をもたらす」（Böning 同上、113）したし、とりわけ宗教改革を巡る論争に関連する報道は当然のことながら「読者の自己認識形成に貢献した」に違いない（Böning 同上、115）。周辺で展開される戦争に関する報道であれば、身の安全を危惧せざるをえない切実さをもちながら読むはずである。

〈知識社会学の観点〉

新聞が初めて日常的に流布させた科学的認識や情報に、地理的世界認識の拡大、政治社会構造に対する認識（それまで一般に知らされていなかった宮廷政治などの機密領域の情報漏出などによる）が加わることで、受容者にはある種の「束の間の疑似的万能感（allmächtig）」を経験すること、そしてそれを蓄積することとなったのではなかろうか。政治的な公共圏の議論では、機会を与える場の一つとしてコーヒーハウスが挙げられる。Duchkowitsch（2011）は、アウグスティノ会宮廷説教師 Abraham a Sancta Clara の記録を紹介しているが、靴職人などが「発言権もないことも承知の大政治の未来について、国主という架空の役回りを演じて語り

合う」様子を描写、報告している。これは17世紀末のことではあるが、一種の一時的万能感を傍証しているといえまいか (Duchkowitsch 2011, 450)。しかも、人口の三分の一が宮廷や宮廷貴族により生計を立てていた都市ウィーンでの話である (Duchkowitsch 同上, 441)。新聞登場前の段階では、「政治的、経済的、軍事的事件が個人にとっては、馴染みのない、得体のしれない力が働くもので、予め計算することも、見通すことも、それに関与することもできない自然災害のように思われていた」との推測 (Böning 2005, 105) は、逆に新聞以前の民衆にあった「無力感 (ohnmächtig)」を表現しているとも言える。現在までの400年余りのニュースの消費は、この自己認識、社会認識に絡む二つの極端な感情間の往還の繰り返し、しかも永遠の自動運動とも考えられる。なぜなら、万能ならざる人間が片時獲得した知識に酔ったとしても、同時に次なる疑問と未知、不知が襲い、必然的に信仰に存在理由の余地を与えるからである。それは教会の教義が変容し、ある意味で狭められながらも、社会制度としての信仰の領域が現在まで保持されてきていることと表裏一体と考えることもできる。これについては宗派的境界は存在しない。

この二つの領域の区別は、知識社会学の意図する集合的記憶と解すれば、文化的記憶とコミュニケーション的記憶の区別にもつながるものかもしれない。集合的記憶では、「記憶の内容がどのように具体的に維持され、伝えられ、蓄積され、また変容させられるのかという問題が立てられている」(Vogd 2007, 456)。このことを踏まえると、アンダーソン¹⁴⁾のいうネイションという共同体形成の重要な動因としての新聞に行きつくことも容易に理解できる。知識の伝達者としてのメディアは、当然ながら「知識分配の構造を決定」(Vogd 同上, 326)するが、それは一義的には社会経済的要因に左右され、人々が意図的、恣意的に決定していたわけではないのである。そして17世紀の段階では、いまだに集合的記憶に大きな影響を与えうるもう一つの柱である国民皆教育は存在しなかった。とすれば、史上初の定期的公共メディアであった新聞のもつ重要性は強調してもしすぎることはない。こうした事情に、印刷物や大学での講義で国民言語たるドイツ語使用の比重が高まっていったことは追い風になったというよりも、その帰結の一つとして受け止めるべきかもしれない。

ヴェーバーは資本主義の意図せぬ思想的出発点を社会の精髓を抉り出すように論じたが、宗派的境界を越えて受容された新聞は、科学的、理性的世界観の拡大を通じてヨーロッパ社会の近代化を促進させた。宗教改革が第一次意識革命だとすれば、新聞も長期の斬進的な影響行使による第二次意識革命を成し遂げたとも言えるだろう。

5 結びに代えて

かつてプロテスタント教会の牧師が話してくれた逸話が今も記憶に残る。ある旧植民地出身

の著名な非ヨーロッパ人がキリスト教徒を批判した。キリスト教徒は信仰という部屋と現実という部屋の二つを使い分けて出入りし、その一貫しない行動を黙認していると。信仰に表された理想と厳しい現実との乖離、その両者を一つに統合することは能わず、しかも個人のレベルにとどまらず、社会全体がこの克服できない矛盾と永遠に対峙せざるをえない状況を指すと理解できる。1980年代にフライブルク大学の図書館玄関に掲げられていた「真理は汝らを解放する (Die Wahrheit macht euch frei.)」(ヨハネによる福音書 8章 32節) という格言は、上に述べた永遠の往還運動からの解放を無意識のうちに意図していたのかもしれない。

注

- 1) カエサル (近山金次訳)『ガリア戦記』岩波書店。
- 2) 共同訳聖書実行委員会 (1991)『聖書』日本聖書協会。
- 3) 手書き通信については、江口 (2016b)、江口 (2017a) 参照。一般に手書き通信が文字通り手写のため二桁程度の枚数であったと考えられているのに対して、印刷新聞の部数は少なくとも三桁であったと考えられる。
- 4) Francesco Patrizi da Chero (1529-1597) はヴェネツィア、ローマ等で活躍したクロアチア系の哲学者、人文主義者。
- 5) 江口 (2017b)、江口 (2018) 参照。
- 6) ハンブルクには貸本屋ならぬ「新聞小屋 (Zeitungs-bude)」が新聞の販売価格の半額で新聞を読ませたとされる (Böning 2005, 112)。また、新聞購読の場として例に挙げられるコーヒーハウスについても、ハンブルクでは最初のコーヒーハウスが1677年に開店、1700年6軒、1750年14軒、1810年では32軒まで増加したとされ、客は店が用意した様々な新聞を読んでいた (Böning 2005, 134)。
- 7) オング (1991) 第3章参照。
- 8) Bentele, G./ Brosius, H.-B./Jarren, O. (2006) Lexikon Kommunikations- und Medienwissenschaft. VS Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden, 194f.
- 9) 江口 (2019) 参照。
- 10) カトリック教会がミサでの使用言語をラテン語から各国語に転換したのは第二ヴァティカン公会議後で、ドイツの場合1970年である。しかも、カトリック神学者による聖書のドイツ語訳の試みは、すでに16世紀に始まっているが、これを権威づけたり、公認、正典化する動きは認められていない。
- 11) 1745年創刊の雑誌 Wandsbecker Mercur などは、記事対象に対する「いかなる敬意も示さず、嘲笑的で皮肉に満ちたニュース」を掲載し、読者獲得に努めた (Böning 2005, 132)。
- 12) エンゲルジンは「書籍の権威の動揺」も問題にしているが、宗教改革によりすでに既成の権威は動揺し始めている (Engelsing 1970, 977)。しかし、書籍としての聖書の権威が揺らぐことは、苛烈な異端審判などの影響もあってか確認できるケースはわずかであろう。
- 13) Schellmann (2013) に記載されているリュネブルクの出版社の出荷状況を見ると、聖書を中心とする教会関連の印刷物が圧倒的であり、それが読書対象に反映されると考えられる。
- 14) アンダーソン (2007)『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』(白石隆/白石さや訳) 書籍工房早山。

参考文献

- 江口 豊 (2014) 「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 67、1-22。
- (2015) 「駅通制度と新聞成立の関連について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 68、57-77。
- (2016a) 「新聞成立期における印刷監督制度について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 22、95-112。
- (2016b) 「フッガー通信について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 23、35-49。
- (2017a) 「手書き通信の成立と拡散について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 70、37-58。
- (2017b) 「多義的なメディア見本市通信について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 25、57-77。
- (2018) 「見本市通信の受容について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 26、127-139。
- (2019) 「新聞成立期における新聞受容の前提について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 72、95-108。
- オング、J.W. (1991) 『声の文化と文字の文化』、(桜井直文/林正寛/糟谷啓介訳) 藤原書店。
(Ong, J. W. (1982) *Orality and Literacy. The Technologizing of the Word*. Methuen, York)
- バーク、P. (2004) 『知識の社会史』新曜社、東京。
- Bauer, V./Böning, H. (2011) *Die Entstehung des Zeitungswesens im 17. Jahrhundert. Ein neues Medium und seine Folgen für das Kommunikationssystem der Frühen Neuzeit*. edition lumière, Bremen.
- Blüm, E./Engelsing, R.(1967) *Die Zeitung. Deutsche Urteile und Dokumente von den Anfängen bis zur Gegenwart*. Ausgewählt und erläutert von Elger Blüm und Rolf Engelsing. Carl Schünemann Verlag, Bremen.
- Böning, H. (2005) Weltaneignung durch ein neues Medium. Zeitungen und Zeitschriften als Medientypen der Moderne. In: Burkhardt/Werkstetter: *Kommunikation und Medien in der Frühen Neuzeit*, R. Oldenbourg Verlag, München, 105-134.
- (2008) Zeitung und Aufklärung. In: Welke/Wilke (hrsg.): *400 Jahre Zeitung*. edition lumière, Bremen, 287-310.
- (2019) *Dreißigjähriger Krieg und Öffentlichkeit*. edition lumière, Bremen.
- Buringh, E./ Van Zanden, J. L. (2009) Charting the Rise of the West: Manuscripts and Printed Books in Europe, a Long-Term Perspective from the Sixth through Eighteenth Centuries.

- The Journal of Economic History*, Vol. 69, No.2, 409-445.
- Duchkowitsch, W. (2011) In Zeitungen „unwahrhaftige Sachen ein Khommen thuen“. Zeitungskontrolle und -lektüre in der kaiserlichen Residenzstadt. In: Bauer/Böning (hrsg.) *Die Entstehung des Zeitungswesens im 17. Jahrhundert*. edition lumière, Bremen., 433-452.
- Engelsing, R. (1970) Die Perioden der Lesergeschichte in der Neuzeit. *Archiv für Geschichte des Buchwesens*, 10, 945-1002.
- Knoblauch, H. (2005) *Wissenssoziologie*. UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz.
- Kurth, J. (1944) (Hrsg.) *Die ältesten Schriften für und wider die Zeitung: die Urteile des Christophorus Besoldus (1629), Ahasver Fritsch (1676), Christian Weise (1676) und Tobias Peucer(1690) über den Gebranch und Missbrauch der Nachrichten*. Rohrer, Brünn.
- Schellmann, W. (2013) Das Kontobuch der Lüneburger Offizin der Sterne. In: *Archiv des deutschen Buchwesens*, Bd. 39, 47-103.
- Schützeichel, R. (Hrsg.) (2007) *Handbuch Wissenssoziologie und Wissenschaftsforschung*. UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz.
- Stieler, K. (1969) *Zeitungs Lust und Nutz*. Vollständiger Neudruck der Originalausgabe von 1695. Herausgegeben von Gert Hagelweide. Carl Schünemann Verlag, Bremen.
- Vogd, W. (2007) Soziales Gedächtnis. In: Schützeichel (hrsg.) *Handbuch Wissenssoziologie und Wissenschaftsforschung*. UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz, 456-462.
- Weber, J. (1993) Daniel Hartnack — ein gelehrter Streithahn und Avisenschreiber am Ende des 17. Jahrhunderts. Zum Beginn politisch kommentierender Zeitungspressen. In: *Gutenberg-Jahrbuch*, Bd. 68, 140-158.
- Wilke, J. (2015) (Hrsg.) *Die ältesten Schriften für und wider die Zeitung. Christophorus Besoldus (1629), Ahasver Fritsch (1676), Christian Weise (1676) und Tobias Peucer (1690), Johann Ludwig Hartmann (1679), Daniel Hartnack (1688)*. Nomos, Baden Baden.
- Zwierlein, C. (2006) *Discorso und Lex Dei. Die Entstehung neuer Denkrahmen im 16. Jahrhundert und die Wahrnehmung der französischen Religionskriege in Italien und Deutschland*. Vandenhock & Ruprecht, Göttingen.

(2021年11月11日提出、2021年11月11日受理)

《SUMMARY》

〈Research in progress〉

On the social impacts and historical role of newspapers in 17th century Germany

Yutaka EGUCHI

The dissemination of news by newspapers in Germany and other European countries immediately evoked various responses, much as the emergence of all other later news media has. During the 17th century, many scholars and academics discussed the pros and cons of newspapers. In their most famous publications in the second half of the 17th century, compiled and edited first by Kurth (1944) and then again by Wilke (2015), authors including Stieler (1695) attempted to clarify not only the benefits of printed newspapers, but also their inherent risks. However, no author denied the social merits of newspapers, even though they stood in unison against the notion of the free press. Prints without censorship were just unsuitable for the absolutistic political system of the time. These scholars also continued to maintain the Bible and God as the source of ultimate authority, and to identify human curiosity as the main psychological reason to »consume« the news.

After a summary presentation of these scholars' arguments, this paper seeks to outline the historical meaning of newspapers from the respective viewpoints of historical reader research and the sociology of knowledge.

Engelsing (1970) presents a working hypothesis that the reading of the Bible, i.e. different texts in one book which remain the same, was a process which was repeated regularly and intensively, while the reading of secular texts, which occurred first mainly in the 18th century, is an action which was performed only once, and that was irregular and wide-ranging. Newspapers were perceived as peculiar in that the act of reading them was one which was regularly repeated, yet extensive (in the sense that texts were somehow new each time and mostly read only once). The contents of newspapers could be circulated not only by reading but also by reading out loud to listeners. In this way, a wide reception in German society then occurred, even for illiterates. Historically, the Bible had been the dominant commodity in the printing market until the appearance of newspapers in the 17th century. At that time the simultaneous consumption of two completely heterogeneous reading matters was possible and

even became routine.

Böning (2005) explains processes of historical development in relation to the political public sphere over two centuries, starting with the emerging of newspapers. He points out the importance of news texts as a new secular reading matter, contrasted to the devotional one. Böning argues that during the period before the advent of newspapers, while the Bible was peoples' main reading material, the reader felt powerless in the social political context because of their lack of information about the system of rules. On the other hand people could feel temporarily somehow omnipotent after reading a newspaper, because it provided them modern rational insights and extended their vision on reality in a geographical and social political sense. The readers of both sorts of text swung continually between the two psychological poles. The consumption of newspapers could strengthen and widen secular tendencies, first driven by Protestant ethics as Weber argued, across denominational borders to wider society, and thus contributed to modernization.